

病理診断科

- 1) 組織診 6,277 件(前年比 96%、うち予防検診センターなど 855 件)、迅速診断 455 件(前年比 105%)、細胞診 4,243 件(前年比 98%)、迅速細胞診 120 件(前年比 90%)、病理解剖 6 件(前年比 38%)であった。常勤病理医 3 名(うち病理専門医 3 名、細胞診専門医 2 名)、非常勤病理医 2 名、非常勤病理コンサルタント 1 名、臨床検査技師 6 名(うち細胞検査士 5 名)、写真技師(兼任)1 名で対応した。
- 2) 組織診のうち診断が困難であった 11 症例については専門病理医にコンサルトし、正しい病理組織診断のもとで適切な治療が行われるように努めた。院外コンサルト症例の内訳は、肺 3 例、軟部 2 例、リンパ節 1 例、甲状腺 1 例、皮膚 1 例、骨 1 例、心筋 1 例、乳腺 1 例であった。院外から当科へのコンサルト症例は婦人科系 5 例であった。
- 3) 病理診断において診断確定および治療方針決定のために免疫染色の重要性が高くなっている。当科では 1 年間に 1,808 症例(全症例の 28%、前年比 107%)で免疫染色を施行した。
- 4) 症例検討会は CPC 7 回(全 13 症例)、消化管生検検討会 9 回、腎生検検討会 4 回、乳腺症例検討会 1 回を開催した。
- 5) 検体取り違えの防止などのためにコンパクトデジタルカメラ、Nanozoomer データ保存のために内蔵ハードディスク 14TB x 2 を導入した。
- 6) 2007 年に導入したバーチャルスライドシステム(NanoZoomer Digital Pathology)は、悪性腫瘍症例の保存、借用標本の保存、電子カルテからの参照(2,606 症例、769GB)、院外コンサルテーションの補助、症例検討会、臨床医向けのサービスに活用した。
- 7) 2002 年から病理肉眼標本のデジタル撮影を開始し、19 年となった。1 年間に 15,409 カット(前年比 130%)が撮影され、データ量は 415GB(前年比 128%)であった。すべて高品質のデータ(RAW)として保存され、電子カルテでの参照、学会発表、論文作成に活用されている。

8) 日本病理精度保証機構の 2020 年度外部精度評価(染色サーベイ、フォトサーベイ)に参加し所定の基準を満たしたことを認定された。

9) 2021 年度も精度管理の充実に努め、正確な病理診断で患者さんに応えたい。

(部長 小川 博)

・医師数	3 名	・専攻医	0 名
・初期研修医	0 名	・合計	3 名

(2021 年 4 月現在)